

第5章 「子どもの学習」へのかかわり

第1節 学習のようす

第2節 学習へのかかわり

筑波大学教授 櫻井 茂男



序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

資料編

第1節 学習のようす

2007年に比べ、1週間の勉強日数にも、1日の勉強時間（学習塾などの時間も含める）にも、大きな変化はない。ただ、小2生のそれらは増えたり、のびたりしている。勉強時間を学校の成績との関係でみると、ほとんどの学年で成績下位群に微増が認められた。

(1) 子どもの勉強日数

子どもが家で、1週間に何日くらい勉強をする（学習塾や予備校などでの学習は含めない）かをたずねた。回答は、「ほとんど毎日（週に6～7日）」「週に半分以上（週に4～5日）」「週に半分以下（週に2～3日）」「週に1日くらい」「家ではほとんど勉強しない」の5つの選択肢のなかからひとつを選択する形式であった。

家で“よく勉強する”小学生が7割を超える

図5-1-1には、小学生と中学生に分けて、それぞれの選択肢を選んだ母親の比率が、調査年ごとに示されている。また、勉強日数の平均も掲載されている。

小学生では、「ほとんど毎日（週に6～7日）」の比率が、2002年より25.8%→2007年40.2%→2011年42.9%と変化しており、2002年から2007年への14.4ポイントの大きな増加の後、2007年から2011年へは2.7ポイントの小さな増加となっている。こうした増加傾向は「確かな学力」を形成するために、小学校で宿題を多く課すようになったことと関係があるものと思われる。なお、「週に半分以下（週に2～3日）」の比率は、2002年より19.9%→2007年12.2%→2011年11.7%と変化しており、2002年から2007年で7.7ポイントの大きな減少が認められ、その状態が続いている。図5-1-1の注2に示され

ている方法により、1週間の勉強日数の平均を算出すると、2002年より3.7日→2007年4.4日→2011年4.5日となっており、2007年で大きく増加した傾向が2011年でも続いている。

一方、中学生では、「ほとんど毎日（週に6～7日）」の比率が、2002年より23.5%→2007年22.1%→2011年26.3%と変化しており、2007年では1.4ポイントの微減であったが、2011年では2007年に比べ4.2ポイントのやや大きな増加がみられる。2002年の数値は小学生（25.8%）とあまり変わらないが、小学生が2007年に大きな増加を示し2011年もその傾向が続いているのに対して、中学生ではそれほどの増加傾向はみられない。その結果、1週間の勉強日数の平均も、2002年より3.3日→2007年3.2日→2011年3.4日という小さな変化にとどまっている。なお、中学生では、各選択肢の比率が小学生よりも均等化している。「ほとんど毎日（週に6～7日）」「週に半分以上（週に4～5日）」「週に半分以下（週に2～3日）」「家ではほとんど勉強しない」の比率は20%前後となっており、個人差（勉強日数のばらつき）が大きくなっていることがうかがえる。

2011年の調査で小学生と中学生を比べると、「ほとんど毎日（週に6～7日）」の比率が、小学生が42.9%、中学生が26.3%と大きな開きがあること、さらに「ほとんど毎日（週に6～7日）」に「週に半分以上

(週に4～5日)」を加え、“よく勉強する子ども”の比率を比較すると、小学生では72.9%と7割を超えるのに対して、中学生では48.4%と5割にも満たないことがわかる。いずれの指標でも、小学生のほうが中学生よりも勉強している日数が多いといえる。ただ、この質問には学習塾や予備校などでの学習を含めていないため、子どもが純粋に勉強している日数とはいえない点に注意をする必要がある。

小学生では2007年と2011年がほぼ同じ変化、中学生では2007年と2011年に加え2002年もほぼ同じ変化をしている。

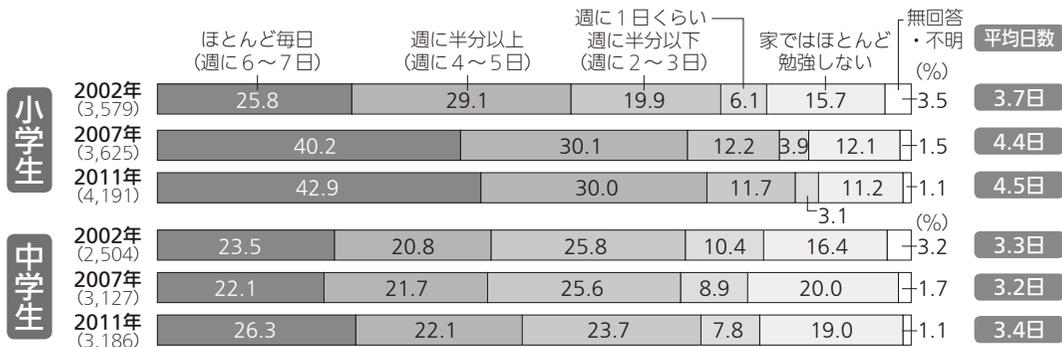
2007年と2011年のデータを比較すると、小学生では小2生で0.5日の増加、小5生でも0.3日の増加がみられる。小2生の増加は小学校での学習内容の増加にともない、宿題がかなり増えたためではないかと考えられる。中学生では中2生に0.4日の増加がみられる。

なお、1週間の平均勉強日数が最少なのは、いずれの調査においても中2生で、2002年2.9日→2007年2.7日→2011年3.1日と変化している。一方、最多なのは調査ごとに違い、2002年は小1生と小3生で3.8日、2007年は小1生で4.6日、2011年は小2生で4.7日となっている。

.....
家での勉強日数がとくに増えた小2生

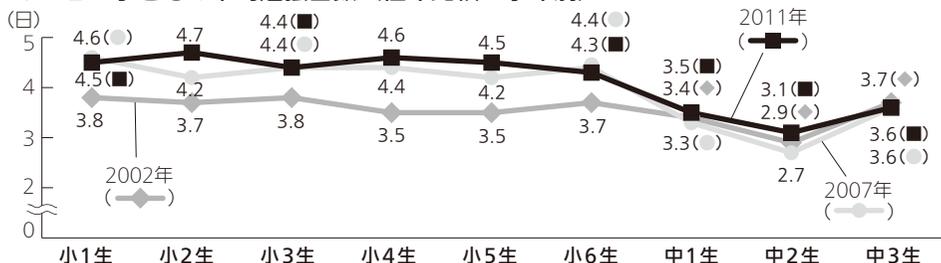
1週間の勉強日数の平均（算出方法は図5-1-2の注2を参照）を、学年別に、2002年および2007年のデータと2011年のデータを比較した。図5-1-2の折れ線グラフをみていただきたい。

図5-1-1 子どもの勉強日数（経年比較 学校段階別）



注1) 勉強日数は、学習塾や予備校などでの学習を除く。
 注2) 子どもの勉強日数の平均は、「ほとんど毎日（週に6～7日）」を6.5日、「週に1日くらい」を1日、「家ではほとんど勉強しない」を0日のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。
 注3) () 内はサンプル数。

図5-1-2 子どもの平均勉強日数（経年比較 学年別）



注1) 勉強日数は、学習塾や予備校などでの学習を除く。
 注2) 子どもの勉強日数の平均は、「ほとんど毎日（週に6～7日）」を6.5日、「週に1日くらい」を1日、「家ではほとんど勉強しない」を0日のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。
 注3) サンプル数は、2002年（小1生577人、小2生610人、小3生612人、小4生573人、小5生604人、小6生603人、中1生858人、中2生823人、中3生823人）、2007年（小1生728人、小2生709人、小3生659人、小4生580人、小5生475人、小6生474人、中1生1,094人、中2生1,000人、中3生1,033人）、2011年（小1生666人、小2生691人、小3生689人、小4生751人、小5生673人、小6生721人、中1生1,181人、中2生1,070人、中3生935人）。

(2) 子どもの勉強時間

子どもがふだん（月曜日～金曜日）、学校での授業以外に1日に何時間くらい勉強をするかをたずねた。この質問では、学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間も含めている。ここでの勉強時間とは“学校以外での（総合的な）勉強時間”とみればよいであろう。回答は、「ほとんどしない」「およそ30分」「1時間」「1時間30分」「2時間」「2時間30分」「3時間」「3時間30分」「それ以上」の9つの選択肢のなかからひとつを選択する形式であった。

学校以外でする勉強の時間が増えた小学生

図5-1-3には、小学生と中学生に分けて、それぞれの選択肢を選んだ母親の比率が、調査年ごとに示されている。また、勉強時間の平均も掲載されている。

小学生では、「ほとんどしない」の比率が、2002年から14.2%→2007年10.6%→2011年8.7%と変化し、減少傾向がみられる。一方、「1時間」の比率は、2002年21.2%→2007年22.9%→2011年26.5%と増加傾向がみられる。その結果、小学校以外で勉強する時間の平均（算出の方法は図5-1-3の注2を参照）は、2002年50.7分→2007年53.8分→2011年57.1分と増加傾向を示し、2011年は2002年と比べると6.4分の増加となっている。

中学生では、「ほとんどしない」の比率が2002年から10.1%→2007年13.1%→2011年11.6%と微増したのち微減しており、大きな変化および一定の傾向はみられない。一方、「およそ30分」の比率は、2002年13.4%→2007年15.3%→2011年17.7%と増加傾向がみられる。こうした結果の総合として、中学校以外で勉強する時間の平均（算出の方法は図5-1-3の注2を参照）は、2002年87.5分→2007

年82.6分→2011年81.7分と減少傾向を示し、2011年は2002年と比べると5.8分の減少となっている。図5-1-1の勉強日数で指摘したことと同様であるが、中学生の場合には各選択肢の比率が小学生よりも均等化している。「ほとんどしない」「およそ30分」「1時間」「1時間30分」「2時間」の比率は、10%から20%前後の間にある。個人差（勉強時間のばらつき）が大きくなっていることは同様である。

2011年の調査で小学生と中学生を比べると、「ほとんどしない」に「およそ30分」を加えて“学校以外であまり勉強しない子ども”の比率をみた場合、小学生では50.8%、中学生では29.3%と20ポイント程度の差がある。さらに、勉強時間の平均で見ると、小学生が57.1分、中学生が81.7分と、こちらも24.6分の差が認められる。中学生は小学生に比べ、学習塾や予備校に通うことが多く、おそらくはそのために学校以外でする勉強時間が長くなっているものと思われる。

学校以外でする勉強の時間が減った小6生？

子どもがふだん、学校以外でする勉強の平均時間（算出方法は図5-1-4の注2を参照）を、学年別に、2002年および2007年のデータと比較した。図5-1-4の折れ線グラフをみていただきたい。

3回の調査とも同じような変化をしているが、どちらかといえば、2007年と2011年のデータのほうが類似している。大雑把にとらえると、小6生まで増加し、その後は中2生まで変化がなく、中2生から中3生へは大きな増加を示している。当該勉強時間の目安としては、小4生で60分、小6生から中2生で75分、中3生で105分程度である。

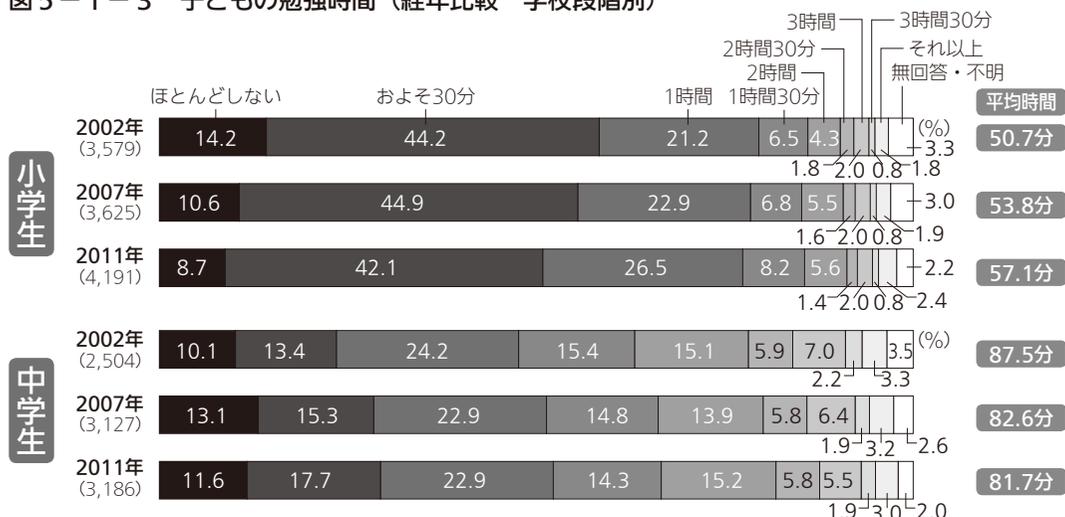
2007年と2011年のデータを比較する

と、小学生では小2生で5.4分の増加、小6生では7.1分の減少がみられる。小2生の増加は図5-1-2の勉強日数の増加と同様であり、小学校での学習内容の増加にともない、宿題がかなり増えたためではないかと考えられる。小6生の減少の理由がよくわからない。中学生ではいずれの学年でも大きな変化はみられない。

なお、学校以外でする勉強の平均時間が

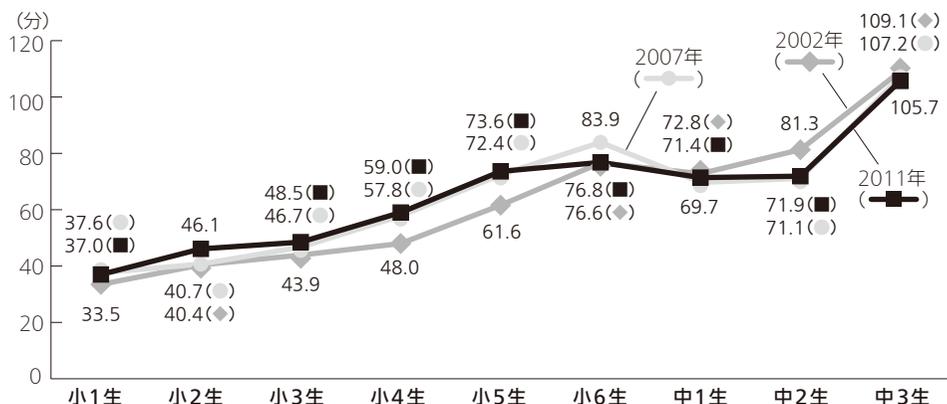
最少（最短）なのは、いずれの調査においても小1生で、2002年から33.5分→2007年37.6分→2011年37.0分となっている。一方、最多（最長）なのはいずれの調査においても中3生で、2002年109.1分→2007年107.2分→2011年105.7分となっている。いずれも大きな変化はない。最少（最短）時間と最多（最長）時間の差は70分前後である。

図5-1-3 子どもの勉強時間（経年比較 学校段階別）



注1) 勉強時間は、学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間を含む。
 注2) 子どもの勉強時間の平均は、「ほとんどしない」を0分、「およそ30分」を30分、「3時間30分」を210分、「それ以上」を240分のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。
 注3) ()内はサンプル数。

図5-1-4 子どもの平均勉強時間（経年比較 学年別）



注1) 勉強時間は、学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間を含む。
 注2) 子どもの勉強時間の平均は、「ほとんどしない」を0分、「およそ30分」を30分、「3時間30分」を210分、「それ以上」を240分のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。
 注3) サンプル数は、2002年（小1生577人、小2生610人、小3生612人、小4生573人、小5生604人、小6生603人、中1生858人、中2生823人、中3生823人）、2007年（小1生728人、小2生709人、小3生659人、小4生580人、小5生475人、小6生474人、中1生1,094人、中2生1,000人、中3生1,033人）、2011年（小1生666人、小2生691人、小3生689人、小4生751人、小5生673人、小6生721人、中1生1,181人、中2生1,070人、中3生935人）。

(3) 子どもの学校の成績

子どもの学校での成績が、クラスの中でどのくらいかをたずねた。回答は「上のほう」「真ん中より上」「真ん中くらい」「真ん中より下」「下のほう」という5つの選択肢のなかからひとつを選択する形式であった。

..... 学年の進捗とともに分散化する

母親の成績評定

図5-1-5には、小学生と中学生に分けて、それぞれの選択肢を選んだ母親の比率が、調査年ごとに示されている。また、成績の平均も掲載されている。

小学生では、3回の調査の間に大きな違いはみられない。しいていえば、「真ん中くらい」の比率が、2002年から44.2%→2007年41.1%→2011年45.8%と変化し、減って増えていることが特徴である。各選択肢の比率を大雑把にとらえると、「上のほう」が10%程度、「真ん中より上」が20%程度、「真ん中くらい」が45%前後、「真ん中より下」が10%程度、「下のほう」が5%程度である。成績の平均(図5-1-5の注1に示された方法により算出したもの)は、2002年から3.4→2007年3.3→2011年3.3となっており、変化はほとんどみられない。また、いずれの調査でも「無回答・不明」が数%いることから、小学生の母親にとってわが子の成績の評価は難しい(よくわからない)ことが推察される。

中学生でも3回の調査の間に大きな変化はみられない。しいていえば、「下のほう」の比率が、2002年から10.9%→2007年13.4%→2011年14.4%と変化し、増加傾向にあることが特徴である。各選択肢の比率は小学生の場合と違い、均等化してくる。各選択肢の比率を大雑把にとらえると、「上のほう」は15%程度、「真ん中より上」は20%強、「真ん中くらい」は25%強、「真ん

中より下」は15%程度、「下のほう」は10%強となっている。成績のバラツキが顕著になっている。成績の平均は、2002年調査から3.2→3.1→3.1とほとんど変化がない。

2011年の調査データで小学生と中学生を比べると、「上のほう」の比率が小学生は10.8%であるのに対して、中学生は16.0%と数ポイント高い。反対に「真ん中くらい」の比率は小学生では45.8%であるのに対して、中学生は28.4%と17.4ポイントも低くなっている。小学生の母親は、わが子の成績がはっきりわからないため、その約半数は「真ん中くらい」とあいまいな評定をしていると考えられる。それに対して中学生の母親は、わが子の成績が徐々に明確になってきており、評価が分散化したものと考えられる。

..... 成績下位群の学校以外での勉強時間が微増

学年ごとに、子どもの学校の成績(母親評定)を3群(上位群・中位群・下位群:図5-1-6の注3を参照のこと)に分け、各群の1日の学校以外での勉強時間を計算し(図5-1-6の注2を参照のこと)、2007年と2011年の結果を示したものが図5-1-6である。成績中位群の結果については図が煩雑になるため割愛した。

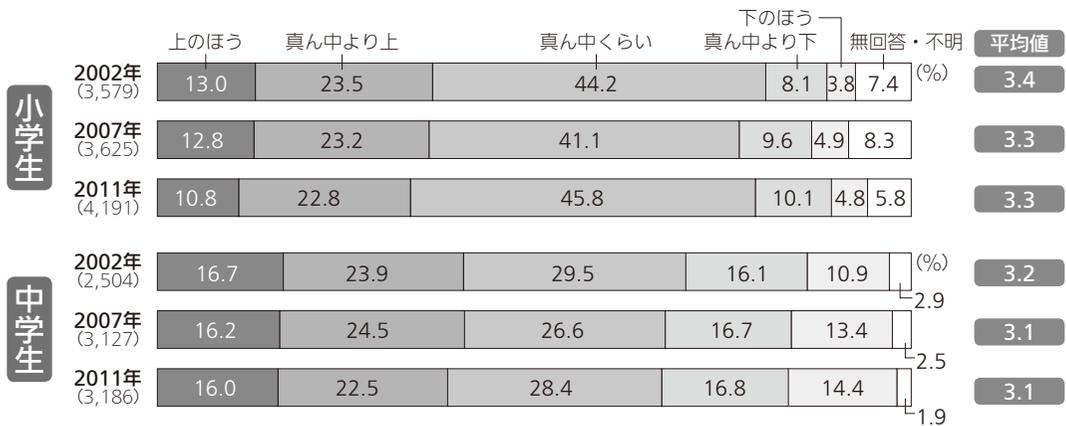
2007年と2011年の結果は類似しているが、違いも認められる。まず、成績上位群の変化をみると、2007年も2011年も同様に、小6生までは徐々に増加し、中1生で減少しそれが中2生まで続き、中3生へと大きく増加する傾向が認められる。2007年と2011年を比較すると、小2生で10.5分の増加、小6生で6.9分の減少がみられる。これは図5-1-4の結果(一般的な傾向)と同様である。ただ、図5-1-4(全体の変化)と比べると、図5-1-6では小

6 生から中 1 生への大きな減少が特徴的である。成績がよい中 1 生は成績がよい小 6 生よりも、1 日の学校以外での勉強時間が平均で 19.0 分（2011 年）あるいは 28.8 分（2007 年）少ないのである。中 1 生あるいは中 2 生の当該勉強時間が、小 5 生あるいは小 6 生よりも少ないということは驚きである。また中 2 生から中 3 生への大きな増加は両調査で変わっていない。これは、いずれも高校受験にともなう勉強時間の増加のためと考えられる。

次に成績下位群の変化をみてみよう。全

般的にみると、2007 年も 2011 年も同様に、小 1 生から中 3 生へと学年の進行とともに、1 日の学校以外での勉強時間が徐々に増加する傾向が認められる。これは成績の上位群と比べると大きな特徴である。また 2007 年と比較すると 2011 年のほうが、各学年の勉強時間は増えている（小 6 生を除く）。とくに、小 3 生で 7.4 分、中 2 生で 4.5 分、中 3 生で 5.0 分の増加がみられる。成績下位群の勉強時間が着実に増えているといつてよいであろう。

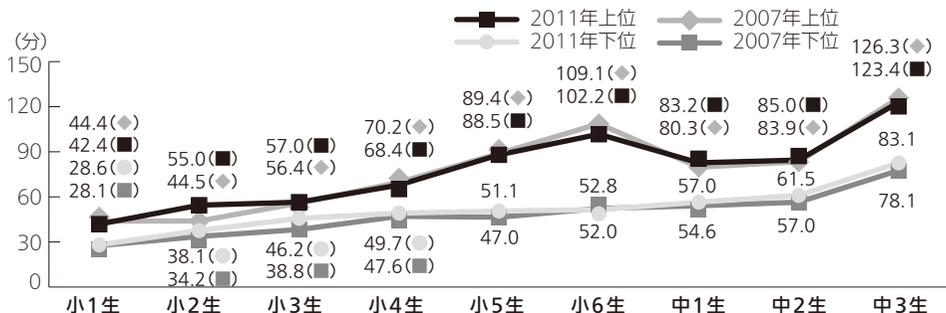
図 5-1-5 子どもの学校の成績（経年比較 学校段階別）



注 1) 子どもの学校の成績の平均は、「上のほう」を 5、「真ん中より上」を 4、「下のほう」を 1 のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。

注 2) () 内はサンプル数。

図 5-1-6 子どもの平均勉強時間（経年比較 学年別/成績別）



注 1) 勉強時間は、学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間を含む。

注 2) 子どもの勉強時間の平均は、「ほとんどしない」を 0 分、「およそ 30 分」を 30 分、「3 時間 30 分」を 210 分、「それ以上」を 240 分のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。

注 3) 子どもの成績は、「お子様の学校での成績は、クラスの中でどのくらいですか」とたずねた質問で、「上のほう」「真ん中より上」を「上位」、「真ん中くらい」を「中位」、「真ん中より下」「下のほう」を「下位」とした。なお、「中位」の数値は省略した。

注 4) サンプル数は、2007 年上位（小 1 生 193 人、小 2 生 241 人、小 3 生 246 人、小 4 生 224 人、小 5 生 197 人、小 6 生 206 人、中 1 生 439 人、中 2 生 394 人、中 3 生 440 人）、2007 年下位（小 1 生 64 人、小 2 生 109 人、小 3 生 95 人、小 4 生 96 人、小 5 生 77 人、小 6 生 85 人、中 1 生 302 人、中 2 生 329 人、中 3 生 311 人）、2011 年上位（小 1 生 149 人、小 2 生 201 人、小 3 生 237 人、小 4 生 278 人、小 5 生 266 人、小 6 生 279 人、中 1 生 439 人、中 2 生 406 人、中 3 生 383 人）、2011 年下位（小 1 生 65 人、小 2 生 98 人、小 3 生 93 人、小 4 生 123 人、小 5 生 122 人、小 6 生 121 人、中 1 生 345 人、中 2 生 353 人、中 3 生 296 人）。

第2節 学習へのかかわり

小学生の母親で、日々の宿題や夏休みの宿題を手伝う傾向が、2002年より徐々に強くなっている。おもに小学生では、母親が勉強の計画を一緒に立てたり、勉強の意義や大切さを伝えたりしている場合、学校以外での勉強時間が長い。

「子どもの学習」への母親のかかわりについて、「学校の宿題を手伝う」をはじめ11項目についてその程度をたずねた。回答は「よくある」「時々ある」「あまりない」「ぜんぜんない」の4つの選択肢からひとつを選択する形式であった。今回の調査（2011年調査）では「子どもが解いた問題のマルつけをする」「勉強の計画を一緒に立てる」「勉強の意義や大切さを伝える」が新設された。

宿題を手伝うようになった小学生の母親

図5-2-1は、11項目のうちの6項目について、小学生と中学生に分け、「よくある」と「時々ある」の比率の合計を経年比較したものである。

小学生をみると、「学校の宿題を手伝う」「夏休みの宿題を手伝う」の2項目は2002年から2011年にかけてかなり増加していることがうかがえる。「学校の宿題を手伝う」では2002年33.5%→2007年35.5%→2011年40.0%と、2007年から2011年での増加が4.5ポイントと大きい。また、「夏休みの宿題を手伝う」では2002年55.7%→2007年62.0%→2011年66.6%と、2002年から2007年への増加は6.3ポイント、2007年から2011年への増加も4.6ポイントといずれも大きな値となっている。小学生の母親は子どもの宿題をよく手伝うようになったことがわかる。小学校で課される宿題が増えたことが理由のひとつであ

ろう。

中学生をみると、「夏休みの宿題を手伝う」は2002年から2011年にかけて23.7%→32.5%と8.8ポイントの大きな増加を示しているが、2007年と2011年を比べると2.2ポイントの増加であり大きな変化とはいえない。「学校のテストの点数を確認する」は、2002年85.1%→2007年88.7%→2011年90.8%と微増を続けている。一方、「学校や塾のノートに目を通す」は、2002年28.3%→2007年33.2%→2011年39.3%と、調査ごとに4.9ポイント、6.1ポイントと大きく増えている。中学生の母親は子どもの学習活動を点検することが多くなってきたといえる。中学生の宿題や勉強については、母親は点検することで精一杯なのではないか。

勉強の意義や大切さをよく伝えている母親

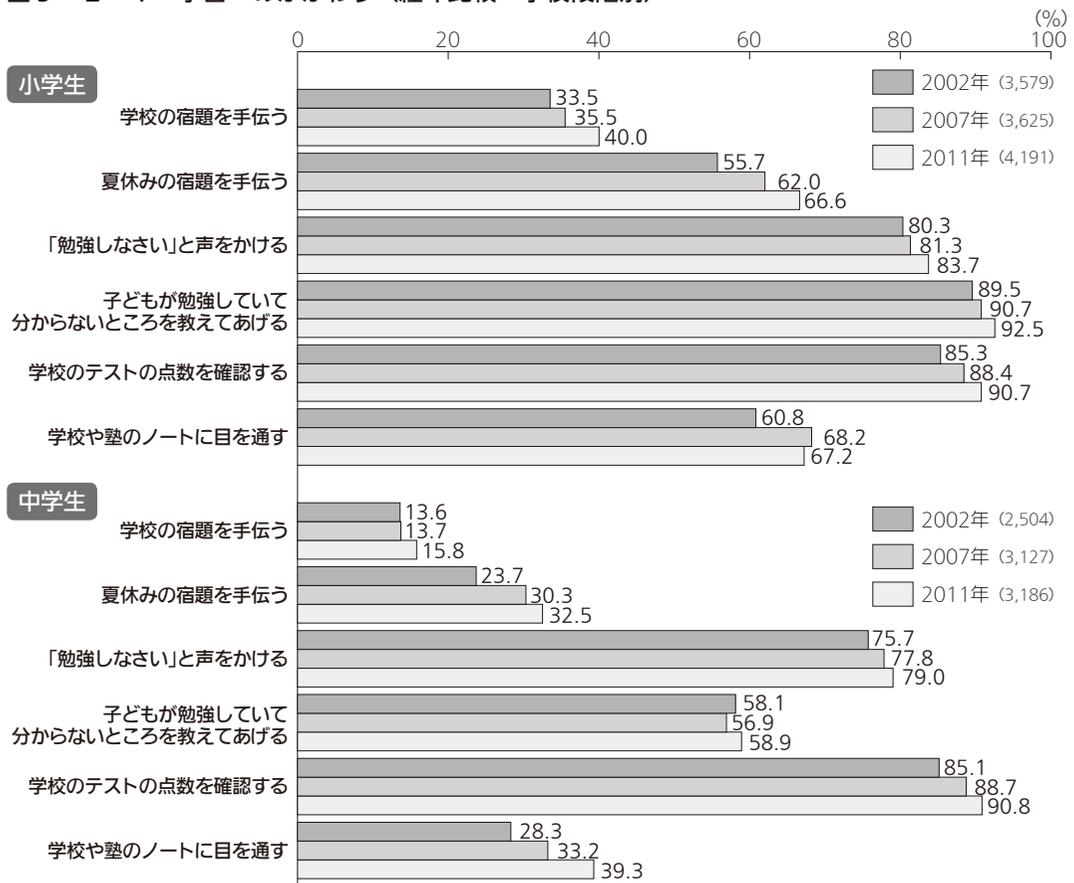
図5-2-2には、今回の調査で新設された「子どもが解いた問題のマルつけをする」「勉強の計画を一緒に立てる」「勉強の意義や大切さを伝える」の3項目について、学年段階別に「よくある」と「時々ある」の比率の合計が示されている。

「子どもが解いた問題のマルつけをする」の結果では、小学校低学年で92.9%の母親が肯定的な回答をしている。ただ、小学校中学年、高学年さらには中学生へと大きな減少が認められ、中学生では19.8%と小学校低学年の4分の1以下となっている。「勉

強の計画を一緒に立てる」にも同様の傾向がみられるが、減少傾向はそれほど大きくはない。小学校低学年では65.3%の母親が肯定的に回答しているが、中学生では24.5%と半分以下となる。これらの項目と異なる傾向を示すのが「勉強の意義や大切

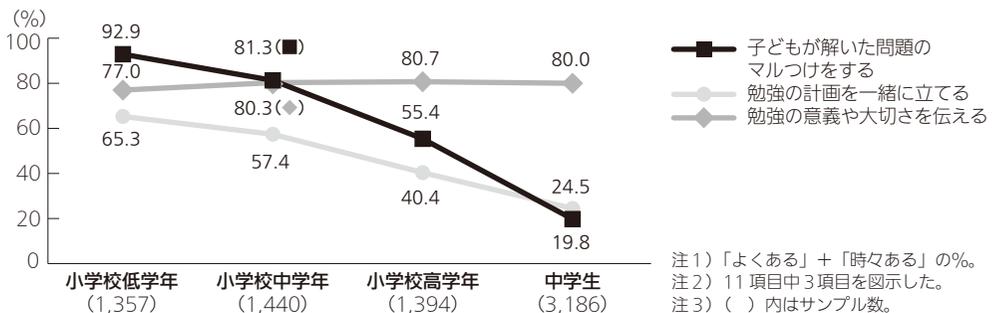
さを伝える」である。小学校低学年では77.0%の母親が肯定的な回答をし、中学生までほぼ横ばいの状態が続く。小学生および中学生の母親の8割前後が、勉強の意義や大切さをよく伝えているということである。

図5-2-1 学習へのかかわり（経年比較 学校段階別）



注1) 「よくある」+「時々ある」の%。
 注2) 11項目中6項目を图示した。
 注3) ()内はサンプル数。

図5-2-2 学習へのかかわり（学年段階別）



注1) 「よくある」+「時々ある」の%。
 注2) 11項目中3項目を图示した。
 注3) ()内はサンプル数。

「子どもの学習」へのかかわりと勉強時間(図5-2-3の注2の方法で算出した1日の学校以外での平均勉強時間)との関係を検討した。「子どもの学習」へのかかわりについての項目ごとに、『よくある』+『時々ある』と『あまりない』+『ぜんぜんない』の2群に分け、各群における子どもの勉強時間の平均を算出し、学年ごとにプロットしたものが図5-2-3における3つの図である。

.....
小学生で効果的な「勉強しなさい」との声がけ
.....

まず、「『勉強しなさい』と声をかける」についてみてみよう。小学生では、小5生を除くとどの学年でも、勉強しなさいと声をかける母親の子どものほうが、声をかけない母親の子どもよりも勉強時間が長い。両者の差がもっとも大きいのは、小6生で10.1分、次が小1生で7.2分、そして小3生の5.9分がつづく。このことは、母親が「勉強しなさい」と声をかけることが、小学生の勉強時間を長くしているものと考えられる。ただ、小5生では反対の結果となっており、その理由はわからない。一方、中学生では、小5生を除く小学生とは反対の傾向がみられる。すべての学年で、勉強しなさいと声をかけない母親の子どものほうが、声をかける母親の子どもよりも勉強時間が長い。中1生から中3生にかけて差は拡大し、中3生では24.3分と飛びぬけて大きな差を示している。中学生の場合には、母親が「勉強しなさい」と声をかけてもほぼ効果がないといえる。全体的にみれば、小学生の場合には母親の「勉強しなさい」という声がけは有効であるといえよう。

.....
母親が子どもと一緒に勉強の計画を立てるほうが勉強時間が長い小学生
.....

次に「勉強の計画を一緒に立てる」につ

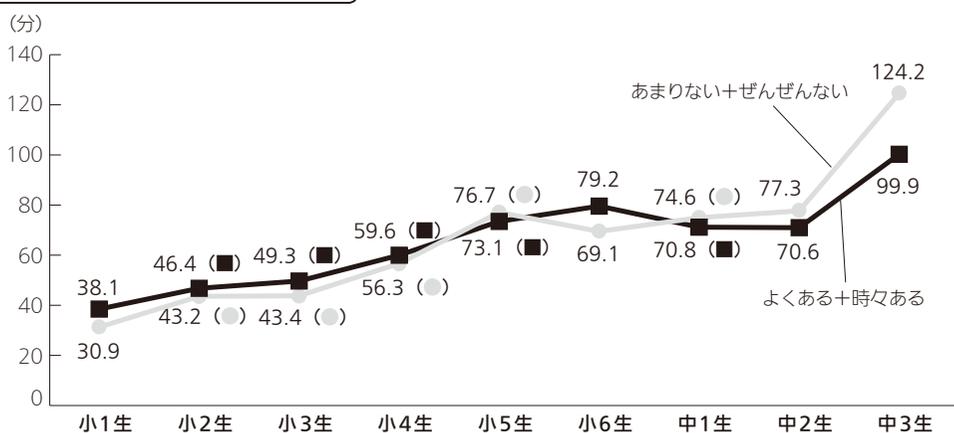
いてみてみよう。この結果には、先の『「勉強しなさい」と声をかける』の結果と大分異なった傾向がみられる。中2生および中3生を除くすべての学年において、勉強の計画を一緒に立てる母親の子どものほうが、勉強の計画を一緒に立てない母親の子どもよりも、勉強時間が長い。差が一番小さい小1生でも8.3分の違いが、差が一番大きい小6生では32.5分の違いがみられる。母親が子どもと一緒に勉強の計画を立てることは、中1生までの子どもにとって、学校以外での勉強時間をのばす効果があるらしい。ただ、中2生や中3生になるとこの効果はないようで、この頃になると、自分で計画を立てて勉強をすることが大切になってくるのではないだろうか。ちなみに、中3生では、母親と一緒に勉強の計画を立てる子どものほうが、そうでない子どもよりも、2.5分であるが勉強時間が短くなっている。

.....
母親が子どもに勉強の意義や大切さを伝えるほうが子どもはよく勉強する
.....

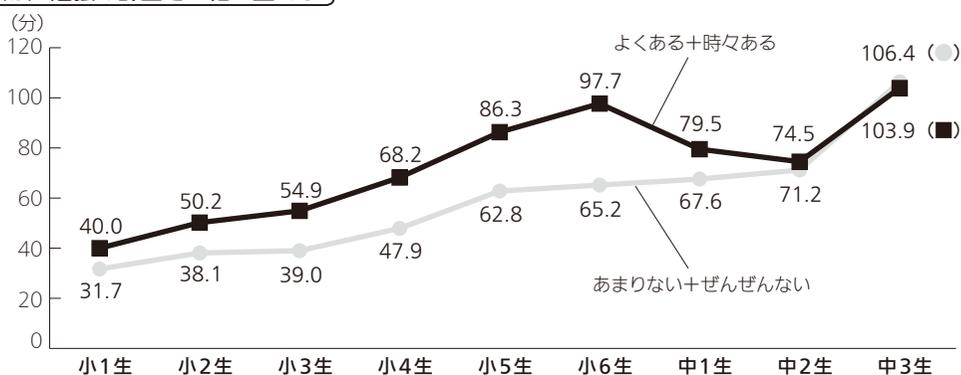
最後に「勉強の意義や大切さを伝える」についてみてみよう。この結果は、先の「勉強の計画を一緒に立てる」のそれと類似している。中3生を除き、勉強の意義や大切さを伝えていく母親の子どものほうが、勉強の意義や大切さを伝えていない母親の子どもよりも勉強時間が長い。小1生、小2生、中2生ではその差は10分以下であるが、小3生から小6生までは10分以上で、もっとも長い小6生は28.7分の差がある。母親が勉強する意義や大切さを伝えることには、学校以外での勉強時間をのばす一定の効果があるものと思われる。ただ、この効果も中3生になるとなくなるようである。

図5-2-3 子どもの平均勉強時間（学年別／学習へのかかわり別）

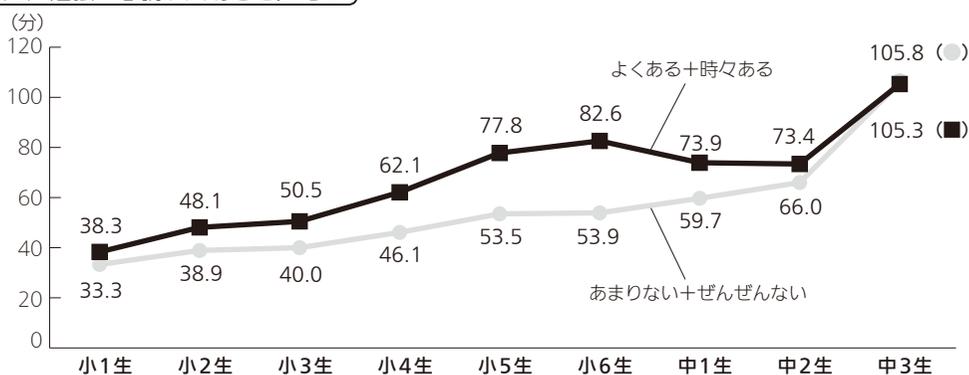
(a) 「勉強しなさい」と声をかける



(b) 勉強の計画を一緒に立てる



(c) 勉強の意義や大切さを伝える



注1) 勉強時間は、学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間を含む。

注2) 子どもの勉強時間の平均は、「ほとんどしない」を0分、「およそ30分」を30分、「3時間30分」を210分、「それ以上」を240分のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。

注3) サンプル数は以下のとおり。

	小1生	小2生	小3生	小4生	小5生	小6生	中1生	中2生	中3生	
「勉強しなさい」と声をかける	ある	566	601	592	644	555	549	974	842	701
	ない	97	84	95	99	109	168	200	213	225
勉強の計画を一緒に立てる	ある	427	459	414	412	304	259	380	230	171
	ない	231	227	270	334	366	453	796	831	757
勉強の意義や大切さを伝える	ある	493	552	550	606	550	574	965	859	727
	ない	165	135	137	141	117	140	207	198	201

「子どもの学習」へのかかわりと子どもの学校での成績との関係を検討した。学校の成績は、図5-2-4の注1に示した方法で得点化した。「子どもの学習」へのかかわりについての項目ごとに、『よくある』+『時々ある』と『あまりない』+『ぜんぜんない』の2群に分け、各群における子どもの成績の平均を算出し、学年ごとにプロットしたものが図5-2-4における3つの図である。

.....
**子どもの成績が悪いと
母親は学校の宿題を手伝う**
.....

まず、「学校の宿題を手伝う」をみてみよう。全体としては、学校の宿題を手伝わない母親の子どものほうが、学校の宿題を手伝う母親の子どもよりも、成績がよいといえよう。各学年における成績の差は、もっとも小さい中1生で0.1、もっとも大きい小4・5・6生で0.6である。基本的に、子どもの学校の成績が悪いと思う母親が、子どもの宿題を手伝っているものと理解できる。ただ、中学生になると成績の差はごくわずかになる。

.....
**学校の成績が悪いと母親は
「勉強しなさい」と声をかける**
.....

次に『勉強しなさい』と声をかける」をみてみよう。小1生から中3生まで、一貫して、勉強しなさいと声をかけない母親の

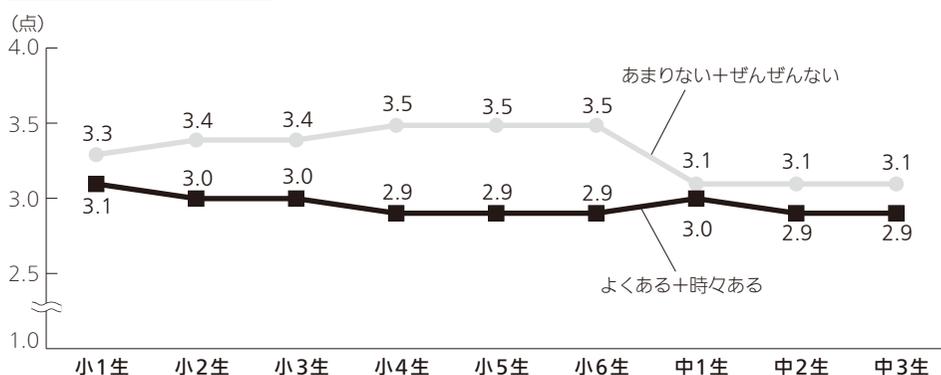
子どものほうが、勉強しなさいと声をかける母親の子どもよりも、成績がよいといえよう。各学年における成績の差は、もっとも小さい小2生で0.3、もっとも大きい中3生で0.8である。小1生を除けば、全体の傾向としては、小2生から徐々に成績の差が大きくなるものといえる。勉強しなさいとの声かけは、図5-2-3(a)によれば、小学生では勉強時間をのばすために有効であるといえるが、この結果(図5-2-4(b))によれば、小・中学生に共通して成績が悪いためにそうしているが有効ではない、ともいえそうである。

.....
**母親が学校のテストの点数を確認すると
成績はよい**
.....

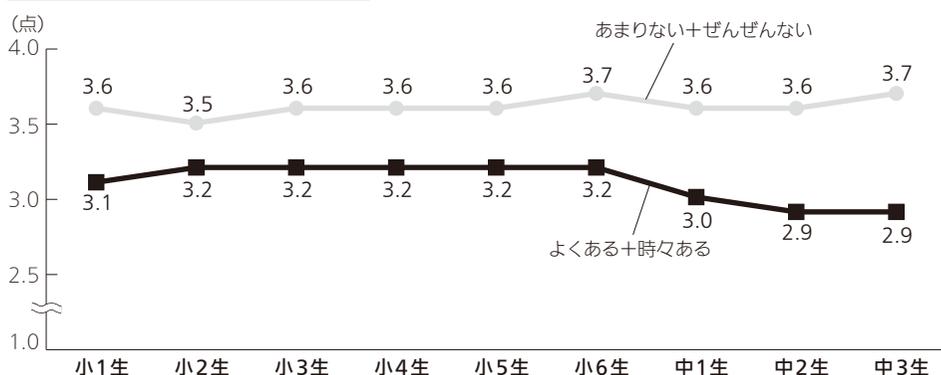
最後に「学校のテストの点数を確認する」をみてみよう。「学校の宿題を手伝う」「勉強しなさい」と声をかける」の前2項目とは、ほぼ反対の結果がみられる。全体的な傾向としては、学校のテストの点数を確認する母親の子どものほうが、学校のテストの点数を確認しない母親の子どもよりも成績がよいといえよう。ただ、その差にはばらつきがある。各学年における成績の差は、もっとも小さい中3生で0(差がない)、もっとも大きい中2生で0.5である。差が小さいのは、中3生を除けば、小1・2生および小5・6生である。差の大きさの偏在については、その理由がわからない。

図5-2-4 子どもの学校の成績 平均値（学年別／学習へのかかわり別）

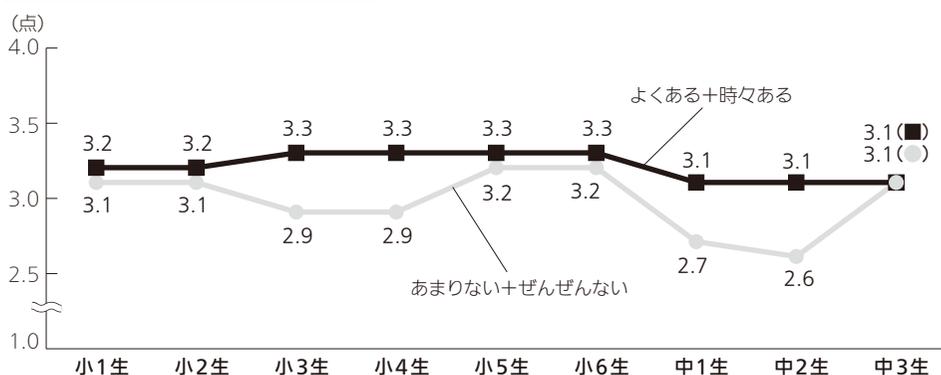
(a) 学校の宿題を手伝う



(b) 「勉強しなさい」と声をかける



(c) 学校のテストの点数を確認する



注1) 子どもの学校の成績の平均は、「上のほう」を5、「真ん中より上」を4、「下のほう」を1のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。

注2) サンプル数は以下のとおり。

		小1生	小2生	小3生	小4生	小5生	小6生	中1生	中2生	中3生
学校の宿題を手伝う	ある	366	341	270	291	221	185	246	144	112
	ない	296	346	417	454	449	532	931	913	820
「勉強しなさい」と声をかける	ある	566	601	592	644	555	549	974	842	701
	ない	97	84	95	99	109	168	200	213	225
学校のテストの点数を確認する	ある	598	654	642	682	598	625	1079	978	836
	ない	59	33	44	65	71	91	94	84	94